

「人生の時間と能力開発と生活のゆとり」

リガテック特許商標事務所 北岡 敬三

1. はじめに

私たちの人生は短いもので、あるときにふと振り返れば、睡眠時間、食事時間、通勤時間などを除くとそれほど長くはありません。人生における幸せは、よく他人との比較で感じるがありますが、実際にはそれぞれの心の問題であり、人生における幸せは人生における自己満足と充実感により支配されるようです。

男女別や年齢あるいは気力体力によって、人生における自己満足や充実感が異なり、しかも時代の変化が激しく各種の規制撤廃の時代でもあります。国家資格についての規制緩和により、隣接する複数の国家資格の境界線が不明確になりつつあり、1つの国家資格が独占的に行える職業能力が変化しており、現実には1つの国家資格に頼って生活することが難しくなってきました。

2. 能力開発の手法

ある目的を達成しようとするための能力を開発しようとする場合には、図1に例示していますが、①個人が自己の努力で得られるものと、②個人が自己の努力をするだけでは得られないものがあります。

具体的なわかりやすい例としては、ある個人が医師を職業として選ぶ場合には、①個人が自己の努力で得られるものとしては、例えば医師免許のような国家資格の取得であり、②自己の努力だけでは得られないものとしては、例えば医療過誤を未然に防げ

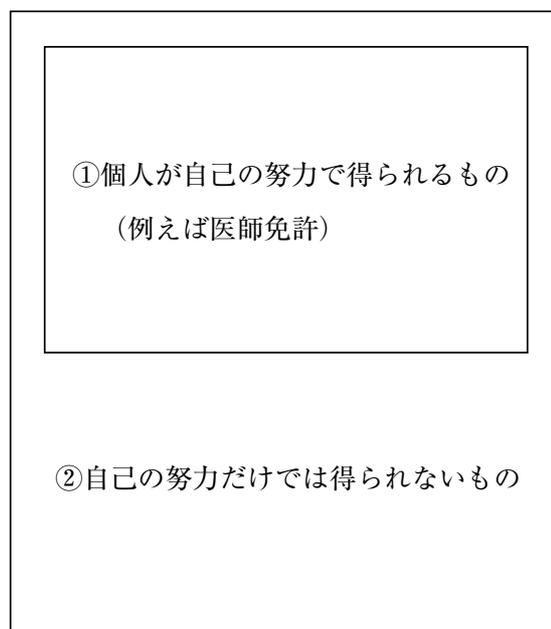


図1

るような医療環境を得ることや、特定の医療分野の専門医になることです。

医師を職業とする場合には、上述した2つの観点①、②の両方の能力開発を行わないと、現実にはまともな医療行為はできないわけです。個人が自己の努力で得られるものとして、例えば上述した医師免許を取得する際には、できるだけ無駄のないように広範囲に最小時間で学習することを心がけて、無我夢中になって能力を高めるべきです。

このところ知識の暗記を非難する意見もありますが、私は短時間での知識の詰め込み暗記は、高い職業能力を得るためには、職業能力の開発トレーニングとして是非とも必要であると確信しています。あ

る期間では、無我夢中になって強い好奇心で知識を繰り返して暗記すべきです。その暗記を行う時間帯や場所は自分の好みで選べばよいのです。知識を猛烈に暗記したことにより、次のようなメリットがあります。

暗記しようとする分野とその周辺分野の関係の理解が、ある日突然できるようになり、この要領を体得すれば、さらに広い分野が体系的に理解できるようになります。

例えば乳ガンX線検査装置であるマンモグラフィの学習と、乳ガンに関する医学知識の暗記と理解を行うことで、マンモグラフィによる乳ガンの診断についての学習を関連づけて学習できます。知識の暗記は、知識の理解と応用の基礎になるばかりでなく、何かを即断する際の原動力になります。もちろん確実な知識は、再度文献や解説書などで確認する必要がありますが、現時点における医学知識は、以前の医学知識に比べて膨大なものであり、ある程度実践に使える基礎知識があらかじめ頭の中に体系的に記憶されていないと、詳細で確実な高度な知識や専門知識を短時間で調べることもできないわけです。

このような猛烈な学習を短時間でを行う工夫をする一方で、人間的なバランスを欠かないようにするために医学とは全く関係のない分野で、興味のあることを通じて人間のバランス感覚能力の向上を図るとよいでしょう。例えば、自己の人間的なバランスを確保し、しかも患者さんに安らぎを与えられるような音楽活動を行うなどといったことです。

猛烈な学習をして医師免許を取得した後は、医師として働くわけですが、医療過誤を未然に防げるような医療環境のなかにおいてある分野の専門医になる必要があります。これが、②自己の努力だけでは得られないものであります。優れた医療環境と優れた医学倫理を理解するための医学生に対する教育の試みは、医学部のカリキュラムの中に導入され始めてはいます。しかし、医療機関全体における優れた医療体制の確立は、これからです。

ある個人をある組織に入れて活躍をさせようとする場合には、その個人の力が組織の仕事環境において即戦力として役に立つことが望まれます。したが

って、組織は最初からより高い職業能力を備える人材を確保する傾向がますます強くなっています。優れた医療環境を保つために、例えば医学部を卒業した時点で、医療過誤などの問題に対応するためにロースクールに通って、法律知識を身につける必要があるかもしれません。

この例のように、以前では考えられないくらい複雑な日常の業務を行うために、一見して関連の薄い領域の学習の必要が生じてきています。

しかし、こんなに学習に時間をとられていたのでは、実際に社会に出て実務に就く年齢が上がってしまうことになり、大切な若い頃の時間の多くを取られてしまいます。

そこで、大学などの教育機関は、能力が高くしかも希望する人に対しては、学習期間の短縮制度を積極的に提供して、できる限り短い年限で卒業させる制度を早急に積極的に採用すべきです。例えば、個人の希望と能力に応じて医学部の卒業年限を6年のところ5年に時間短縮し、ロースクールは3年のところ2年に時間短縮するといった要領です。とにかく、学習期間はその人の能力に応じて別個に柔軟に適用する制度緩和を行うことで、職業能力開発にかかる時間は全員に対して平等に必要であるという固定観念から脱皮することが必要です。これによって、専門職の国際的競争力があがり、教育現場には緊張感がでて新たな魅力が生じます。また、時間的な余力ができれば、海外留学もしやすいのです。

別の例をあげれば、私が学生時代から不思議に思っていたのは、例えば工学部の各種の学科では卒業するための学習最低期間が4年間に統一されていますが、学習期間を4年間に統一しないで、学生は学科によっては独自に3年とか4年半などといろいろと学習期間の選択幅からなぜ自由に選択できないかということでした。現実には、各学科の学習ボリュームは同じではなく、かなり開きがあります。

若者の中に志の高い人もいれば、一度社会で働いて職業能力の中身を方向転換する人もいますが、人生で使える時間は短いもので、年齢的に経済的に余裕のない場合には、特に社会と経済の構造改革が進んでいる現在、このような期間短縮形の学習が新た

な価値観を創出するのに有効であります。この場合には、学習日は、週休2日に固定しないで土曜日と日曜日にも学習できる制度にして、昼間部と夜間部のいずれでも自由に受講できるようにするべきです。たとえそれが医学部であったとしてももはや例外ではありません。

3. 生活のゆとりと高齢化

つい最近までは、若いころの能力開発を怠らなければ、中高年になるとある程度の生活にゆとりができたものです。この理由としては、中高年になった人は社会の若者の労働に支えられた社会の恩恵により、生活のゆとりを得たのです。

しかし、このごろは事情が大きく変わり、少子化と若者の学習意欲の減退と高齢化社会の到来により、このような生活のゆとりはもはや得られません。人々は、中高年になってもやはりせつせと自分の職業能力を磨かなくてはならなくなりました。

図2は、若年齢のころ、中年のころ、そして高年齢のころに分けて、職業能力を構成する要因を簡単に示しています。職業能力を構成する要因には、体力、気力、理解力、経験などがありますが、体力と気力の維持には健康を保つことが大切でありま

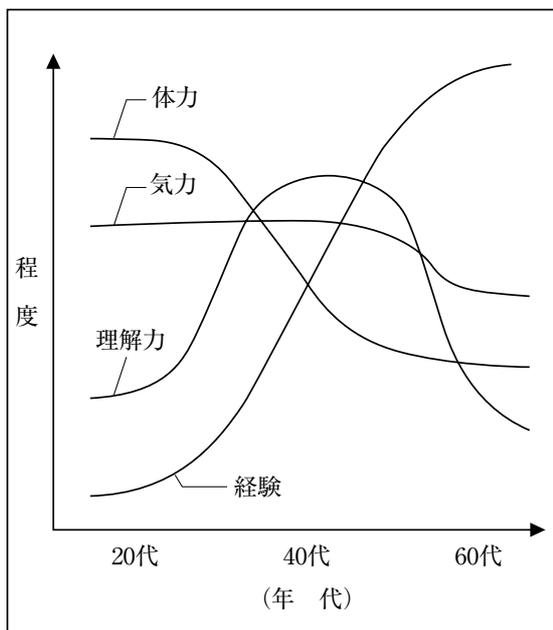


図2

す。理解力と経験は、通常加齢とともに増すものです。

しかし、このごろは仕事では能力主義と成果主義が採用され、転職すれば職種が変わってしまうことが多くなり、加齢とともに体力と気力は消耗しやすく、しかも新しい職場ではこれまでの理解力と経験はあまり役立たないことがあります。

4. 生活のゆとりと楽しみ

では、このように加齢とともに低下していくことがある気力と体力を補いながら仕事をして、しかも生活レベルをある程度維持していくにはどうすればよいのでしょうか？

その答えは、以前の仕事環境に比べて、楽しみながら仕事ができる職種と環境を選べばよいのです。このためには収入は大幅に減少するでしょうから大変であり、生活レベルをある程度下げなければなりません。

加齢により人生の楽しみは変化していきます。各個人によって異なりますが、少しでも楽しみながら仕事が行えることが生活のゆとりにつながり、生活に必要な仕事をできる限り短時間ですませて、あいた時間を生活のゆとりと楽しみに変えることです。

例えば、建築技術に詳しく介護に興味があれば、介護に適した住宅のリフォーム設計を行ったり、自動車の運転が好きで介護に興味があれば、介護の送迎の仕事を行ったり、人に物事を教えるのが好きで旅行に興味があれば、旅行コンダクターになったり、外国語と技術が好きなら、科学技術の翻訳士になったり、花と写真と陶芸が好きならば生け花の先生になってみたりすることです。

このように、若い時代であっても中高年になっても、しなければならないある仕事や学習に要する時間を、いかに常識のレベルから短縮できるかによって、生活を楽しむゆとりが生まれることがあります。